

## 最優秀賞

「蛇口をひねれば水が出る」は当たり前ではない

鹿島高等学校附属中学校

二年 渡邊 桃香

手を洗いたい時、のどが渴いた時、水道の蛇口をひねれば、そのまま飲むことができ、きれいな水が出てくる。それが日本では当たり前だ。しかし、世界の中には、それが当たり前ではない国がたくさんある。

例えば、アフリカでは浄水設備が無いだけでなく、井戸などの貯水設備も少ない。貯水設備があったとしても、管理が施されないため、不衛生な水になっている。また、内戦や紛争が多いことで水道施設が無い場所に追いやられている人々もいるのだ。このような地域では朝、壺を持って家を出て、半日ほどかけて水を汲みに行き、夜にやつのことで家に帰り、その水を煮沸消毒する労力をかけて、水を飲んで

ているのだ。この手間ひまがかかっている水はとても貴重であり、人々は水をとっても大切に扱う。とはいえ、世界にこのような状況下におかれている人々がいること自体、当たり前だと思っただけではない。水を汲みに行くために、学校に行くことができない子供もいるのだ。日本と比べると、いくらなんでも、理不尽過ぎると思う。私は、普段毎日お湯をためてお風呂に入っていることさえ水を無駄使いしているように感じた。それほど格差が激しいと思う。

もし、日本でもこのような状態になったらどうなるのだろうか。朝起きたら、重い壺を抱えて遠くまで歩く。たどり着いたのは泥の混じった水で、それを汲み、また元の道に戻り殺菌してやっと飲める水になるのだ。私は学校に行くのが好きなので、もし毎日水を汲みに行くために学校に行けないのだとしたら悲しい。友達とも会えないし、勉強もできない。それは今の私の生活からは全く想像できない。人は、食べ物が無くても睡眠と水さえ摂れていれば二〜三週間は生きられるという。だから、水は必要不可欠なのだ。そのため、大きな苦勞をしてでも汲

みに行かざるをえないのだ。

そんなアフリカなどの子供たちに、私たちができることがある。汚れた水を安全な飲料水にする浄水剤を購入すること、下痢による脱水症状から子供を救う経口補水液を提供することなど、数千円の支援で多くの子供たちの暮らしを改善することができ。私も大人になって収入を得るようになったら支援したいと思うし、するべきだとも感じている。

近い未来、発達した貯水設備・浄水設備の技術が日本などから伝わって、アフリカなどの世界の国々も蛇口をひねって水が出る日が来なければならぬと思う。日本とアフリカはとても遠いので、日本だけでなく、様々な国同士で協力していく必要があると考える。

私が理想とする人は、アフガニスタンの人々に寄り添い、65万人の命と生活を守った医師、中村哲さんである。中村さんは、復興に生涯をささげた。私は将来、医師になりたいと考えている。その理由のひとつは、病気に苦しむ子供たちがいることを知ったことである。私が学校に行っている間に、友だ

ちと笑っている間に、治療を頑張っている子供がいる。そんな現状がとても心苦しいからだ。

世界では汚れた水を飲んだことで病気になり、抵抗力の弱い子供たちは亡くなってしまいうこともある。また、不衛生な水しか無い劣悪な環境の中で生活している、身体を清潔に保てないために病気になりやすくなってしまう。こんな状態がずっと続いて良いわげがない、と強く感じた。そのため、医師になるための勉強をする際には、水に関する病気やその予防策も学び、私にできることをしたいと考えている。

今私ができることは、水を大切に使用することだ。人々に直接豊かな水資源を届けることはできないけれど、意識することが必要だと感じている。蛇口をひねれば水が出ることを、当たり前だと思わずに感謝したい。